

東京女子大学と私

坂井 鮎子

はじめに

戦後60年も経ってしまっていて記憶は薄れ、思い違いもままあるかも知れませんが、それはそれとして大まかに青春時代の一時期の思いもかけなかった体験を振り返って見るのも私にとって必要な事かもしれないとペンをとりました。

戦争と私

私と戦争の関わりは、昭和16年女学校入学と同時に始まりました。体操の時間の長刀の練習や分列行進。鉢巻をしめてそれでも「頭右」「直れ」の号令をかけて校庭を廻りました。

父の仕事の関係で3年になると北鮮の平壤（ピョンヤン）から南鮮の京城（ソウル）に転校しました。授業は午前中4時間だけ、午後2時間は軍隊に送る慰問袋の縫製や雲母（電気の絶縁体に使う）剥ぎ、防空壕掘り等でした。大して国家のお役にたっているとの高揚感や自覚もありませんでした。

4年の終わりに近くなると5年生と同時に卒業することになり、将来の進路についても考えなければならなくなりました。当時は卒業生の進学実績がものを言う時代で、私の在籍した京城第一高等女学校の卒業生は、毎年東京女子大学に進学していましたので、私も受験することにしました。同級生の進学者は皆、担任の先生（化学）から文科や家政科に希望を出すと「非国民」となじられました。私はどの学科も特に優劣の差のない成績だったので東京女子大学の数学科と京城女子医専を選びました。

入学試験は内地の学校への進学希望者、朝鮮、満州の受験生を同時に京城に集めて、文部省から試験官が来て志望校、学科、男女、の別なく同一問題で行われました。受験者の総数は分かりませんが、私の受験番号は、1万を超えた番号であったことを覚えています。成績はどうであったか定かではありませんが、口頭試問もあり、私を含めて京城での受験者中、東京女子大学の合格者は3名とのことでした。

京城女子医専にも合格しましたが、私は東京に憧れていましたので、東京女子大学を選びました。その時はノーテンキにも戦争の恐ろしさ等考えも及びませんでした。

しかし、4月に入っても戦争は激しくなるばかりで、内地への切符が買えず東京には行けませんでした。やむなく京城大学理学部に動員され、物理学科の助手として教授の教材の準備を手伝っていました。

朝鮮にはアメリカの飛行機はたまに姿を見せるだけで爆弾は落としませんでした。内地と違って朝鮮では物資は豊富で日常生活に不自由な思いをすることはありませんでした。ただ合格通知を頂いても東京に行けないのが不満でした。

引揚げの体験

8月15日突然終戦。敗戦で日本人は自分の国に帰らねばならなくなりました。その時私は引き揚げるなら1日も早く東京女子大学に入りたい、その一心でした。両親は家、荷物の整理ですぐには出発出来ず私だけ知人の家族と一緒に内地に帰る事になり、9月末にリュックいっぱいの役にはたたなかった本と着替えを詰めて出発。

京城から釜山までの汽車は蒸気機関車で平常は石炭を積む無蓋車にぎっしり積み込まれました。釜山に着いたら顔も服も真っ黒でした。関釜連絡船への乗船は1日待ち。駅のホームで夜を明かしました。翌日乗船。着いたのは翌々日。海には機雷が浮いていて用心しながらの航行でした。下関の予定が仙崎に変更になりました。

内地に着いて驚いたのは、当たり前的事ですが港での仲仕さんや電車の運転士さんの全部が日本人だった事です。朝鮮では労働する人は全部朝鮮の人だったからです。一寸したカルチュアショックでした。

引揚者の証明書を頂いてDDTの洗礼を受けやっとな引き揚げ先の佐賀行きに汽車に乗る事ができました。

10月に入ってやっとな9月繰り上げ卒業で佐賀に帰って来た姉と出会い、焼けずに済んだ布団を貰って早速東京に送り返し、私一人やっとな切符を手に入れて上京しました。途中広島駅で見た街は瓦礫の山で見渡す限り真っ黒、人通りも見かけませんでした。視界を遮るものは何もない不思議な世界でした。戦争の恐ろしさをやっとな実感した思いでした。

東京に着いて見ると広島程ではなかったものの矢張り焼け野が原でした。山手線の新大久保駅のホームから中央線の大久保駅のホームが見えるほどその間はただ瓦礫の山でした。

けれど幸運にも学校は無事残っていました。嬉しかった事・・・

選れてきた私に学校は大変親切に扱って下さり、寮にも入れていただきました。

入学はしたものの

10月下旬、数学科の教室に入って驚きました。5年の課程を4年しかしかも午前中しか授業を受けていない不満足な状態の上に、空襲下とはいえ4月に開校、9月からの本来の授業の蓄積は私にとって、大変な重荷でした。毎日ノートをお借りして写すだけで精一杯それでも写しきれずに、

冬休みもノートをお借りして家に帰りました。
今思うとよくまあ貸して下さったなあと感謝の気持ちで一杯です。
この年は、一年に一度の期末試験で及落がきめられました。チンプンカンプンの期間もどうやら過ぎて理解できるようになったとたんの試験でした。
3月初めの期末試験程、私の一生の間で勉強した記憶は他にありません。
夜は白々と明け始めても、まだ問題の全部は解けず理解も不十分のまま登校しなければなりませんでした。試験の間中泣きべそ顔の情けない思いをしながら試験を受けていました。ともあれ何とか進級できました。
2年生になっても、同級生の優秀さは目を見張るばかりでした。毎日1講時1時間半の間に宿題20～30題を事も無げにどんどん解いて、しかも教わった解き方ではなく、自分で学んだ解き方を先生に見て頂くのですから驚きでした。本当の学問の仕方を同級生から学びました。

寮生活の思い出

敗戦後の食糧事情は極端に悪く、配給制度で、それも量は少なく滞りがち、白米などの配給は殆んどありませんでした。主なものはとうもろこしや黍の粉、さつま芋やそのつる（茎）、色の黒いメリケン粉、ふすま（牛や馬の飼料、麦を製粉する時にでる皮の部分の粉）等でした。

寮の食事は、朝食と夕食はすいとんか、米粒が数えられる程の薄いおかゆ
昼食は、ねずみの尻尾の様な細いさつま芋が2個か3個。これは配給ばかりではなく寮生の世話をしていた方々が、汗水流して寮の周囲を芋畑にして作って下さった貴重な食料でした。野菜は殆んどなかったのも、校庭でノビルやアカザを摘んでたべました。とにかくお腹がすいた毎日でしたので、おやつに、とうもろこしの粉やふすまに少しばかりのメリケン粉と塩に水、膨らし粉を混ぜ、板の箱にニクロム線を銅板に通したものを貼った、今では珍しいパン焼器でパンを焼いて食べました。

夜は電力不足でしょっちゅう停電。ローソクが頼りでした。それなのに寮への電力供給量をオーバーして使ったと、高額な罰金の請求がきました。とても払える金額ではありませんでした。寮生会議で知恵者がいました。電力会社の組合に交渉しようと言う事になり、代表が談判に出かけました。成功しました。少額の支払いですんだのは、同情されたのでしょうか。

終わりに

私の一生は、自分の意思以外の力に作用され色々な体験を経てそろそろ終わろうとしていますけれど、今になって見ると一瞬にして過ぎ去った様な気がしています。二度と戦争が人の運命を変える事のないように、平和で世界に貢献できる、誇り高い私達の日本である事を、心から祈っています。